

橈骨遠位端掌側プレート抜釘例における 超音波検査を用いた長母指屈筋腱障害の予測

那覇市立病院 整形外科¹⁾ 医療技術部検査室²⁾

又吉修子¹⁾, 岳原吾一¹⁾, 大城 亙¹⁾, 外間 浩¹⁾, 比嘉由紀子²⁾

要 旨

近年、橈骨遠位端骨折治療は掌側ロッキングプレート（以下 VLP）固定が主流となりつつあるが、watershed line と呼ばれる部位を越えて遠位にプレートが設置された場合や、プレートスクリューが掌側に突出した場合の合併症として長母指屈筋（以下 FPL）腱損傷が危惧される。今回、当院で VLP 抜釘を行った 9 例に対し、抜釘前に超音波検査を行い FPL-プレート間の距離を測定して FPL 腱損傷の予測が可能かを検討した。

FPL-プレート間最小距離は平均 0.46mm であり、抜釘時に FPL とプレートとの接触を認めたのは 2 例（いずれも 0mm 判定例）であった。この 2 例を含め全例で術中明らかな FPL 腱実質損傷は認めなかった。

プレート設置後の FPL 腱損傷の評価に超音波検査は簡便で有用な検査であり、FPL-プレート間距離が 0mm の症例では、骨癒合後早期に抜釘を考慮したほうが良いと考えられた。

Key words: 橈骨遠位端骨折, 掌側ロッキングプレート (VLP), 長母指屈筋腱 (FPL) 損傷

看護部全員参加の十分な準備で達成感のある受審に

～那覇市立病院の取り組み～

那覇市立病院 看護部

宮城 とも

要 旨

那覇市立病院（以下、当院）は、470床の急性期病院である（表1）。当院では、病院のさらなる医療の質向上に向けて、2013年9月に病院機能評価を受審した。2003年にバージョン3で認定を受けてから3度目の更新である。

2013年4月から病院機能評価も第3世代となり、新たな枠組みでの評価が開始された。筆者は院内の病院機能評価受審準備委員会で「第2領域」の担当責任者となった。第2領域は「良質の医療の実践1」であり、「病院組織としての決定された事項が診療・ケアにおいて確実に安全に実施されていること」が評価される。これを評価する上で重要な訪問審査は病棟概要確認、ケアプロセス調査、外来訪問などで構成されている。

新しいバージョンでの受審は沖縄県内でも初めてであり、他施設から学ぶことができず、「改定で何が変わったのか、何を求めているのか？どのように取り組んだらいいのか？」など不安だらけのスタートとなった。

不安はあったが、地域医療支援病院、地域がん診療拠点病院として「こころのこもった地域医療を」をキャッチフレーズに地域医療に取り組み、チーム医療が機能している。今回のケアプロセス調査においてはこの経験の蓄積が有利に働き達成感のある受審となった。

ここでは、当院におけるケアプロセス調査のための準備、審査の様子、サーベイヤーとのやりとりによる学び、受審によって得たもの、新評価体系への評価について述べる。

Key words: 病院機能評価, 医療の質

癌性イレウスに対して緩和目的で行った PTEG の 2 例

～当科への導入と展望～

那覇市立病院 外科

長濱正吉，鹿川大二郎，赤嶺健史，桃原侑利，新里千明，高宮城陽栄，
仲宗根尚子，平良 済，知念順樹，小野亮子，真栄城兼誉，金城 泉，
宮国孝男，宮里 浩，友利寛文，山里將仁，大城健誠

要 旨

切除困難な癌性イレウスは経鼻胃管（以下，NGT と略す）が必要となる．今回私達は癌性イレウスに経皮経食道胃管挿入術（以下，PTEG と略す）を施行し死亡まで比較的 QOL を保てた 2 例を経験したので報告する．症例 1 は 50 歳代，男性．2007 年 4 月に十二指腸乳頭部癌で幽門輪温存膵頭十二指腸切除術（Stage IVa）が施行された．術後腹腔内リンパ節再発・腹壁再発・癌性イレウスを発症したが手術を含めた集学的治療で外来通院が可能であった．2013 年 3 月に癌性イレウスが再燃し 4 月上旬に緊急入院となった．胃変形と腹壁腫瘍のため経皮内視鏡的胃瘻造設術（以下，PEG と略す）は施行できなかった．4 月下旬に PTEG を行い 5 月下旬にホスピス転院となった．症例 2 は 60 歳代，男性．2013 年 4 月，前医で胃癌（cStage IIIC）の開腹術が施行された．胃全体の広範な病変で腹水細胞診も陽性であったため空腸瘻にみ造設された．術後温熱療法などを希望し当院に紹介受診となったが，幽門狭窄による癌性イレウス状態であった．8 月上旬，PTEG を施行しホスピスへ転院となった．切除困難な癌性イレウス例に対する PTEG は緩和ケアとして有用な処置であった．

Key words: PTEG, PEG, 癌性イレウス, 緩和ケア

高容量オピオイドを過量投与することなく 疼痛マネジメントと副作用予防が可能となった 1 例

那覇市立病院 看護部

吉澤龍太

要 旨

がん患者の多くが体験するがん性疼痛のマネジメントにおいて、オピオイドは痛みの程度に応じて上限なく調整ができることから中心的な役割を担っている。しかし、実際の臨床現場では必ずしも、患者の痛みをコントロールする必要量を投与されているとはいえない現状にある。それは、オピオイドの副作用、特に行動抑制による傾眠やせん妄という精神症状、また呼吸抑制など過量投与による患者の QOL に支障をきたす副作用に対する医療者の懸念が影響していることが多い。

本症例は 20 代女性乳がん患者で多発骨転移による強度の痛みのコントロールで入院。入院後、オキファスト®持続静脈投与が開始になった。オキファスト®開始から、患者に自身が認識している痛みと眠気の程度を日常生活に支障をきたさないようバランスを保てるようなオピオイド量の調整についてセルフケア指導を行った。セルフケア指導によって、過量投与による副作用もなく、疼痛がコントロールされ、良好な QOL を維持しながら、オピオイドを 2000mg/日以上増量することができた。看護師は、終末期患者であっても、苦痛をもたらす症状をマネジメントするため、患者がセルフケアを獲得できるよう支援していけるような役割が求められる。

Key words: オキファスト持続投与、疼痛緩和、副作用予防、セルフケア、終末期ケア

Streptococcus dysgalactiae subsp. equisimilis (SDSE)による 化膿性脊椎炎の 1 例

那覇市立病院 内科¹⁾ 整形外科²⁾
名富久義¹⁾, 旭 朝弘¹⁾, 勢理客久²⁾

要 旨

症例は 91 歳女性。以前から汎血球減少が認められているが、精査は希望されず、対症療法として定期的に輸血を行っている。今回は発熱を主訴として当院救急外来を受診。救急外来で施行した採血、検尿、造影 CT では発熱の原因は分からず、精査加療のため入院となった。入院後に血液培養から G 群溶連菌 (*Streptococcus dysgalactiae* subsp. *equisimilis* : SDSE) が同定された。また入院時から腰痛の訴えがあり、熱源精査のため 67Ga シンチグラフィーを施行したところ、腰椎に集積を認め、腰椎 MRI では L2 椎体で T1WI 低信号、STIR 高信号の所見があり、敗血症と併せて化膿性脊椎炎と診断した。benzylpenicillin (PCG) で治療を行い、腰痛や発熱などの症状の改善および CRP 値の陰性化を認め、第 41 病日の腰椎 MRI では脊椎炎の改善を認めたため、その後は levofloxacin (LVFX) の内服に切り替え、第 79 病日に退院となった。近年 SDSE による感染症が多数報告されるようになったが、化膿性脊椎炎の頻度は少ないため報告した。

Key words: group G streptococci, *Streptococcus dysgalactiae* subsp. *equisimilis*, 化膿性脊椎炎

黄色肉芽腫性胆嚢炎の 3 例

那覇市立病院 外科，病理診断部¹⁾

長濱正吉，鹿川大二郎，赤嶺健史，桃原侑利，新里千明，高宮城陽栄，
仲宗根尚子，平良 済，知念順樹，小野亮子，真栄城兼誉，金城 泉，
宮国孝男，宮里 浩，友利寛文，山里将仁，新垣京子¹⁾，大城健誠

要 旨

黄色肉芽腫性胆嚢炎（以下，XGC）は胆嚢壁肥厚を呈する胆嚢炎でときに胆嚢癌との鑑別が重要となる．今回私たちは XGC の 3 例を経験したので文献的考察を含めて報告する．【症例 1】80 歳代，女性．2009 年 12 月，右肋骨に沿った痛みを主訴に近医受診し，帯状疱疹と診断され抗ウイルス治療がされていた．軽快しないため腹部精査が追加され胆嚢穿孔を伴う胆嚢炎・胆汁性腹膜炎と診断．当院へ紹介入院となった．経皮的ドレナージ後，待機的胆嚢摘出術を施行した．【症例 2】60 歳代，男性．2010 年 11 月，心窩部痛を主訴に当院救急外来を受診．腹部 CT で胆嚢底部に全周性壁肥厚を認め，胆嚢癌・慢性胆嚢炎が疑われた．保存的治療後，12 月に待機的に腹腔鏡下胆嚢摘出術を施行した．【症例 3】70 歳代，男性．2011 年 1 月，心窩部痛を主訴に当院救急外来を受診．胃十二指腸潰瘍疑いで内服処方された．2 日後脱力感，ふらつきを主訴に当院救急外来を再受診し凝固異常を伴う急性胆嚢炎の診断で緊急入院．第 8 病日に胆嚢ドレナージ施行．その後全身状態は改善．待機手術を予定し一旦退院となった．しかし 2 月に右季肋部違和感・寒気で当院救急外来を再々受診．緊急入院し翌日，胆嚢摘出術を施行した．3 例とも病理検査で XGC と診断された．【まとめ】当科で XGC と診断された 3 例を報告した．様々な臨床経過をたどっており内 2 例は術前にドレナージ術を要する中等症以上の急性胆嚢炎であったが生命予後は良好であった．

Key words: 黄色肉芽腫性胆嚢炎（XGC），急性胆嚢炎，胆嚢癌

血管内超音波でのみ描出できた冠動脈瘤の一例

那覇市立病院 循環器内科

比嘉南夫, 中田円仁, 間仁田守, 旭朝弘, 田端一彦

要 旨

82 歳, 男性. 2013 年 9 月夕方, 胸痛, 背部痛, 冷汗があり, 症状が改善しないため当院救急へ搬送. 冠危険因子は喫煙のみ. 川崎病の既往なし. 心電図で V1~4 の ST 上昇あり, 急性心筋梗塞が疑われ, 緊急冠動脈造影 (coronary angiography : CAG) を施行した. 左前下行枝の近位部に 99% 狭窄あり, 経皮的冠動脈インターベンションを施行. 血栓吸引後に血管内超音波 (intra-vascular ultrasound : IVUS) を施行した. 病変部の血管径は約 8mm あり, 内腔には器質化血栓を思わせる像を認めた. 対照血管径に合わせて, 薬剤溶出ステントを留置した. 7 日後に CAG を施行したが, 冠動脈瘤は描出できなかった. IVUS でしか描出できなかった冠動脈瘤の症例を経験したので報告する.

Key words: 急性心筋梗塞, 冠動脈瘤, 血管内超音波

複数の医院から処方された薬剤で発症した 偽性アルドステロン症と横紋筋融解症の一例

那覇市立病院 内科

保良仁美, 知花なおみ, 新垣大智, 宮城伊久磨, 眞志取多美

要 旨

症例は 60 代, 女性. 四肢のしびれ, 歩行困難で来院。血液検査で著明な低カリウム血症を認め, 病歴, 内服薬, 血液検査結果から, 偽性アルドステロン症による横紋筋融解症と診断した。入院後は補液, カリウム補充を行い, 甘草を含む漢方薬, スタチンの内服を中止としたところ改善した。本症例は, 複数のかかりつけ医から多数の内服薬が処方されており, それらの服薬状況が把握できない中で発症した甘草成分による偽性アルドステロン症と考えられた。多数の内服薬が処方されている高齢者においては, 処方薬の確認のみならず, それぞれの薬剤の服薬状況, さらにそれらの副作用について適切にフォローを行っていく必要があると考えさせられた一例であったので報告する。

Key words: 低カリウム血症, 偽性アルドステロン症, 甘草, polypharmacy

透析導入期に発症したサイトメガロウイルス感染による 小腸穿孔の 1 剖検例

那覇市立病院 腎臓内科¹⁾, 病理科²⁾
上間貴仁¹⁾, 糸数昌悦¹⁾, 宮良忠¹⁾, 新垣京子²⁾

要 旨

症例は 71 歳女性。糖尿病性腎症による慢性腎不全があり心不全にて入院となった。心不全改善後に偽痛風を発症しステロイド内服にて速やかに軽快した。再度発熱し血液培養から黄色ブドウ球菌が検出され傍脊柱筋・腸腰筋膿瘍を認めた。血液培養陽性持続あるため開腹ドレナージ施行し血液培養は陰性化した。その後、血液培養から *acinetobacter* が検出され、腹痛、腹部膨満が出現し CT にて free air を認め、開腹手術にて小腸穿孔を認めた。その後も発熱持続し感染コントロールがつかず永眠された。剖検にて小腸穿孔部位を含め種々の臓器からサイトメガロウイルス (CMV) 感染細胞を認めた。

長期ステロイド使用のない透析導入期患者に発症したサイトメガロウイルス感染を経験したので報告する。

Key words: サイトメガロウイルス, 小腸穿孔, 敗血症, 透析